

ザンツ帝国の歴史を概観していく。その終末はともかく、「いつからはじまったか」がしばしば問題とされるこの帝国の歴史を三三〇年から語りはじめる理由については、冒頭の「はじめに」で著者が説明を行っている。

著者は続けて、四世紀以降のビザンツ帝国の歴史について、さまざまな要素に目を配りつつ、簡潔ながらバランスのよい記述を進めていく。記述の中心はビザンツ帝国の政治的な展開であるが、この帝国の文化的側面や、キリスト教を中心とする宗教的側面にも配慮が行き届いている。四世紀から六世紀までの、いわゆる初期ビザンツ

(古代末期)の時期に関する記述が全体の約半分と大きな比重を占めていることが、気になる人もいるかもしれない。しかし本書が一般向けに書かれた書物である以上、コンスタンチヌス大帝やユスチニアヌス帝といった、ビザンツ史で特に著名な皇帝たちの時代についての記述の割合が多くなることは、理解できる方針ではある。

本書ではペルシア人やアラブ人、ブルガリアや西欧諸国、そして十字軍やトルコ人

といった、ビザンツ帝国の歴史に深いかわりを持った周辺世界や人々との関係について、常に注意を向けつつ記述が進められていく。ビザンツ帝国の歴史を概観していく上で、周辺世界との関係を無視することが不可能なのは当然であるが、とかく煩瑣になりがちなこうしたテーマを明快に整理しながら語っていく著者の手腕は特筆されるべきである。(なお、これは本書の内容には全く関係のないことだが、ビザンツ帝国と周辺との関係を簡単に「文明の衝突」と片づけてしまふ本書の宣伝文句は問題が多いように思われる。)

著者のルメルルは既に一九八九年に没している。それゆえ現在の研究成果からすると、一部に古さを感じさせる記述が散見されるのは仕方がないことである。例えば七世紀の軍管区(テマ)制度のはじまり(九二一九三頁)などがそうである。とはいえ、そうしたことは本書の価値を貶めることにはなっておらず、全体としてはビザンツ帝国に関する通史として、現在でも十分に参照できる内容を持っている。本書は、初学者などが手軽に手に取ることのできる概

説書として、第一にすすめることができる内容を備えている。

ビザンツ帝国やギリシアに関するさまざまな書物の翻訳を手がけてきた西村六郎氏の訳文も読みやすい。ただしアウグストゥス(本書ではアウグスツス)やディオクレティアヌス(本書ではディオクレチャヌス)、あるいはコンスタンティノーブル(本書ではコンスタンチノポリス)のように、我が国における訳語がある程度定着しているものについては、それに従った方がより読みやすかっただろう。(小林 功)

ミッシェル・マルゲラス著

廣田 功・権上康男訳

### 『二〇世紀フランス資本主義史論』

——国家・経済・社会——

日本経済評論社 二〇〇四・四刊  
四六 二〇四頁 二五〇〇円

本書は、フランスの経済史家ミッシェル・マルゲラス(一九五一年生まれ)による二〇世紀前半のフランス経済史に関する啓

蒙的な書物である。戦後、アメリカの研究  
者を中心にして展開されたフランス経済停  
滞論に対して、一九七〇年代以降、実証的  
にそれを否定する反論を提出したのが、い  
わゆるレヴィジョニズムであった。訳者も  
「あとがき」(一九七ページ)の中で述べて  
いるように、マルゲラズの主要な関心が、  
「一九三〇年代初頭から五〇年代初頭にか  
けて、国家の機構と政策が『成長・近代  
化』の課題に適合的な形に『転換』してい  
く過程を総合的に明らかにすること」であ  
り、博士論文をもとに刊行した大著『国家、  
財政と経済』など、彼の一連の業績は、フ  
ランス社会における国家の存在とその大き  
な機能が一貫して継続され、フランス経済  
発展に寄与してきたことを明らかにしてお  
り、これによって、彼は、フランス経済停  
滞論を克服するレヴィジョニストの代表的  
存在となっている。

が扱われている。同氏が二〇〇三年に来日  
された折に、各地で実施した講演をもとに  
しているのが、読みやすい叙述となってい  
るが、論点が少し散漫になっているきらい  
があるのは講演集という性格から致し方な  
いであろう。

第一章で、「戦後フランスの国有化は、  
イギリスのような他の国とは違って、ド  
ゴール將軍から共産党に至るまで、すべて  
の政治的社会的勢力の支持という正当性を  
得ている」(一七ページ)とマルゲラズも書  
くように、国としての危機に瀕して、経済  
を主導するエリートの役割がきわめて大き  
いこと、良くも悪くも国家にイニシアティ  
ブが収斂して、エリートが旗を振ることで  
危機を乗り越えるというのが、フランス的  
なビヘイビアであろう。

占領期フランスにおける高級官僚たちの  
行動と思想に関して述べられている第四章  
において、預金供託金庫が戦中から戦後  
にかけて被った大きな変化の中にあっても、  
「ほとんど変化しない構造とスタッフ」が、  
これらの状況変化に対応して、困難を克服  
したことが明らかにされている。訳者も述

べるように、フランスにおける「国家の役  
割拡大は、両大戦間、とりわけ第二次大戦  
以後、欧米資本主義国に共通する歴史現  
象」(二〇〇ページ)ではあるが、エリート  
層の核が一貫して保存されるところに、フ  
ランスの特徴を見ることができるとはな  
いか。

一般に、大きな戦争で敗れると、体制は  
転倒され、旧来からの支配層は一掃される  
ものである。フランスは第二次大戦の戦勝  
国ではあるが、しかし、緒戦では敗れたわ  
けであり、最終的に自力で勝利したわけ  
はない。このような痛切な経験がフランス  
国民のバックグラウンドにあることを考える  
と、高級官僚を形成するエリート層が戦前  
から戦中・戦後を通じて国家の核として生  
き残っていくというきわめて興味深い過程  
を本書は具体的に明らかにしている。

(中川洋一郎)